非文字資料はいかに認識されるか－知覚をめぐる哲学的諸問題－

的場　昭弘

はじめに

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という表題で始められた神奈川大学のCOEの共同研究も今年で四年目となり、残すところ後一年となっております。日本常民文化研究所で長い間培われた研究を基に出発した研究テーマですが、これまで個別的研究が中心で、全体としてそれらの研究をどうまとめ、どう体系づけるかという点について十分な議論がなされてこなかったというのが現状です。そこで、今年から理論総括班が創設され、理論的な体系化をめざして研究を進めるということになりました。私はその理論総括班の中心メンバーとして理論的課題に取り組むことになりました。

はじめに気がついたことは、非文字資料とは何かという定義についてさえも曖昧なままであったことです。文字資料以外をすべて含むという漠然とした定義で本研究が進められたことにより、「非文字資料とは文字資料でないものすべてである」ということになってしまった観があります。それはそれで間口が広くていいのですが、「人類文化研究のために」という課題を遂行するには、あれもこれも非文字資料と位置づけるわけにいかなくなるわけです。人類文化研究と銘打った以上、たんに非文字資料を並べるだけではなく、それをどう解釈し、そこから何が引き出せるかという方法論が提示されなければなりません。

しかも「体系化」という言葉に関していえば、18世紀の『百科全書』によりますと、体系化とは第一原理によってすべて連関して説明されるものとなっております。すなわち、体系とは、それぞれの個別研究がひとつの原理に基づいて適宜説明されるひとつの系列をなしているものだということになります。

こうした課題がかなり難題であることを承知の上で、「人類文化研究のために」機能し、そして「体系化」も可能な「非文字」の理論的体系を考える作業を以下の手順で考えたいと思います。

まず、非文字資料とは何かという定義について考えます。とりわけ人類文化の中心にある文字資料との関係で、非文字はどういう機能を持ちうるかという点から、非文字資料の定義をまずは考察することにします。

次に文字資料および非文字資料も含めて、人類文化はどう形成されてきたかという問題を哲学的角度から見てみることにします。これは人間の身体にある外部を知覚する襞である五感（視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚）といった器官、そして人間の内部にある精神（霊魂、自我）が、どう世界を知覚しているかというプラトンやアリストテレス以来のもっとも古い哲学上の問題であり、それゆえ容易に解答が出せる問題ではありません。とはいえ、非文字資料といった対象を扱う際に、その対象を正しく理解できるのかどうかといった問題を知ることは重要です。近年では解釈学あるいは現象学といわれている哲学分野がそれを行っています。ある対象を記憶し、想起し、それを学問として分析するのに、偏見や誤謬に陥らないで研究することが可能かどうかという問題は、文字資料における解釈学（Hermeneutics）の問題と並んで、注意を怠ってはいけない問題です。

最後に、こうした定義と哲学上の問題を整理した上で、本研究が行っている非文字資料である、「身体技法、景観、図像」を対象にあげ、それをどう研究し、どう位置づけるのかという問題を提起したいと思います。

1. 非文字資料はどう定義されるか

（1）書かれた文字と話される言葉

非文字資料という概念は、文字資料との対比で使われています。文化を彩るほとんどが文字資料による分析によって成り立っています。しかしながら、文字資料が対象としているのは、圧倒的に非文字資料であります。非文字資料が、文字資料でないものという消極的定義である以上、文字というコード体系に置き換えられる対象の多くは非文字資料ということになります。

ここで文字資料とは、人類が記憶するために使う記号（sign）全体を意味します。当然、それぞれの地域で発展した文法体系によって裏付けられたコードを持つ文字だけではなく、数字や信号なども含まれます。人間の記憶能力が無限であれば、数字のような番号付けによってすべてを記憶し、伝達することが可能であったのでしょうが、人類は少ない単語の組み合わせによってさまざまな内容を伝達するコードの体系をつくりあげます。主語と述語、それに付随するさまざまな目的語や補語、修飾語を付加することで数限りない表現を身につけていきます。

話されている言葉（parole）、すなわち現在われわれが使っている意味での会話は文字に裏づけられたコードの体系になっています。学校での文字教育によって裏づけされたわれわれの会話は、そのまま文字に転化できるような構造を持っているわけです。

もっとも、そうした会話を文章に書き換えたとき、やはり文章表現とは異なる表現に出会います。書かれた文章は、発せられた言葉と違い、何度も推敲され、書き直され、追加され、削除されていきます。その意味で、書かれた文字は、たとえ他人との会話であっても、その会話的部分は削ぎ落とされ、第三者への独白のようなスタイルになります。

とりわけ文字は、そこにいる人に対してではなく、そこにいない人々へ発信することを目的としており、そのため書く人の個性は制限され、抽象的人格として語りかけます。図書館に眠る連綿とつづく文字資料の記録は、過去と未来のコミュニケーションとして保存されたものですが、その文章をいくら読んでも、書いた人の人格などは伝わってきません。

アメリカの言語学者 W. J. オングが『声の文化と文字の文化』（藤原書店、2006 年）の中で、文字は視覚の世界であり、話し言葉は聴覚の世界であると述べていますが、読み取る側から見ればまさにそうであります。文字を読み取るには局所的に視点を定め、ゆっくりと半ば文節を追いながら見ていく必要があります。それに対して話し言葉は、聞き取れる言葉を全体として理解するしかなく、理解は細かいところに及ぶことはありません。

そのため話し言葉は、文法が少々おかしくとも、話す側がどんな状況にいるかによって伝わるような総体的な理解を求めます。そうして理解された話し言葉は、それをそのまま文字として残してもほとんど意味の伝わらない言葉になります。

話し言葉が記憶される場合は、記憶しやすいような韻やレトリックを使ったフレーズが好まれ、またそれを聴く側にとってもその方が、抑揚があり臨場感あふれたものとなります。口述で残された話は、読むより聴いたほうがよくわかるのもまさにこうした問題と関係しているわけです。

さてそうした意味で文字資料が人類文化に残した成果には、確かに偉大なものがあるわけですが、それを知るには長い文章を丁寧に反芻しながら読むといういささか手間のかかる労苦を強いられるわけです。若者たちが読書を嫌うのも、こうした細かい理解を要求するからではないでしょうか。

（2）非文字資料とは何か

確かに話し言葉は、書かれたものでないことによって非文字資料のひとつといえないことはありません。しかし、文字文化に親しんだ世界で話される言葉は、すでに文字言葉の文法によって規定されているので、文字資料と考えられなくはありません。神奈川大学の非文字資料は、話し言葉を直接の研究対象としておりません。

話し言葉は、それを表現する文字を欠いた場合は別として、文字資料に入るとしたら、非文字資料とはどういうものを言うのかが問題となります。ひとつ極端な例を考えましょう。非文字資料を、記号や数字もまったく含まない、文字的コードの体系をまったく欠いたものと仮定してみるのです

人間の生活にとってそれ自体必ずしも意識する必要のない雑多な物の集まりを含めて、非文字資料と置いてみます。信号の色、身体の匂いや動作もすべて何らかの記号をもって、相手に何かを伝えようとしています。しかしここで、非文字資料を、何も伝えることのない、また何も記憶することのない、「ものそれ自体」だと考えてみます。しかしそうしたものそれ自体の資料は、確かに今後われわれにとっての考察の対象となりうる可能性はあるとしても、それを知覚し、理解しようとする人間の行動を抜きにしては、ほとんど意味のない資料ということになります。

そこで非文字資料を問題にするとしても、ものそれ自体ではなく人類にとって何らかの意味をもつものでなければならないことになります。次にそれ自体文字のような明確な記号や意味を表示しないが、しかしあることを示唆、暗示しているようなもの、それを非文字資料と置いてみましょう。記号としての身体動作、音、匂いなどはすべてこの範疇に入ります。

ある時代の明確な文法的コード体系を持つ、狭い意味で書かれた文字資料を除けば、ある種の記号を示すものはすべてこの非文字資料の範疇に入ります。当然書かれた文字であっても、デザインとして文法コードの体系の外にある場合この中に入ります。

改めて定義しなおすと、非文字資料を文字資料の文法コードの体系以外の記号と考えるということです。もちろん記号ですから、たんなるものではなく、誰かが誰かに何らかの意味を伝えようとするものを意味します。そこには、もの物自体の体系的価値があり、それはその時代の人にとって共通に理解できる共通認識でなければなりません。そうした共通に理解できる認識を欠く場合、たとえば仮につかの間の約束事として相互に理解しあえるだけの場合はこの範疇に入りません。あくまでも、その時代、その地域の人々にとって共通に認識しあえる記号がそこになくてはならないことになります。

こう考えると、非文字資料とは、その資料が文字でないという曖昧な意味ではなく、文字ではない資料だが、何らかの共通認識を引き出す資料ということになります。非文字資料が共通認識を持つとすれば、そうした共通認識をする側の知覚の問題が重要な論点となってきます。

文字資料は共通認識を行うもっとも重要な手段です。文字資料のテキストの背後にさまざまな意味が隠されていたとしても、ある文法のコードをもっていれば、そのコードにしたがってある程度共通認識に達することが可能です。たとえ古代人の文字であっても、それがわれわれの文字に置き換えられうるある種の文法構造を持っていれば、おのずとそこに共通に認識しあえる意味が発見できます。恣意的で、偶然的なものであれば、共通認識に到達できません。

もちろんそこには落とし穴があります。それは文字資料の場合でもそうですが、一定の文法コードをたとえもっていたとしても、著者の本来の意図を理解することは容易ではないからです。すべてが明証的である

ことはありえません。そこにはおのずと解釈のずれがうまれます。ポストモダニズムが提起したのは、解釈とはまさにジャック・デリダの差延（différance）のように、意味が時間的にずれながら、相違をもたらすということです。

文字資料に明証性が求められないように、非文字資料にも明証性が求められる必要は必ずしもないわけです。むしろ、共通認識を超えた何か、非文字資料が語る時代を超えた何かを見出そうとすることも必要でしょう。非文字を通じた解釈の多様性、これは近代哲学が模索してきた、知覚による認知の問題でもあります。こうした差延を問題にするために、次に哲学的知覚の問題を議論することにしましょう。

2. 認識するとはどういうことか。

（1）すべての人間が物事を正しく知覚するのはなぜか―デカルトの問題

人間があることを知覚し、理解しえるということはどういうことであるのかという問題ほど、哲学が長い間取り組んだテーマはありません。哲学上認識論（Epistemology）といわれているテーマは、人間が認識していることの真偽をめぐって争われた議論で、哲学の歴史そのものといってもよいテーマです。

どう外部を知覚（perceive）するかという問題は、どう意識（conscious）するか、そうして記憶（memorize）された意識をどう想起（reminiscence）するか、そこからどういったことが想像（imagine）されるかという問題として議論されてきました。これらの一連の行為は、われわれが日ごろ行っている認識行為であると同時に、学問的営為そのものでもあります。誤謬や偏見ではなく真理にいたる道はどこにあるか、厳密な意味で絶対的な知はあるかどうかといった問題を抜きにして、学問のもつ科学性など空虚なこととなります。近代科学が目指した認識の明証性は、こうした行為の中にある確実なものを見つけ出してこそ意味を持ちます。

プラトンは、『パイドン』で人間の霊魂の永遠性を信じ、人間という身体が消滅しても霊魂は存在すると主張します。身体という五感と脳を失った後にある霊魂が存在するというのはおかしな話にも見えますが、霊魂の存在のおかげで、人間が生まれ変わったとき、過去の記憶が蘇るときがあると述べるのです。プラトンが述べる霊魂とは、人間が外界を認識するときになぜ、理性的に理解できるかという問題に対するひとつの回答なのです。

この問題は、17 世紀に形を変えて復活します。すべての明証性を疑ったデカルトが『方法序説』で達した結論は、明証的なものは私が考えるという事実だと主張するのです。認識する主体とは、外界を知覚するときに適宜判断して、何が真理かを見通す役割をする理性のことです。エゴ（自我）を形成する理性こそすべての知覚の判断のもとになります。人間はいつでもどこでも理性を持つことで、つねに外界を冷静に分析し、正しく判断できるというわけです。その場合、外界を知覚する五感は、たんなる外界の襞にすぎず、知覚を決定づけるものは主体たる理性しかないということになります。

（2）感官を通じた知覚―18 世紀の啓蒙主義

まさにデカルトこそ哲学の創始者たるにふさわしい人物です。客観的に知覚するかどうかという問題よりも、外界を知覚する人間の判断に重点を置いたのですから。しかし、彼より少し後、イギリスのジョン・ロックは『人間知性論』の中で、認知を経験的に分析した結果、認知能力は本来前もって人間に備わっているのではなく、五感の働きの中で次第に形成されてくるものであると、デカルトとまったく反対の議論を展開します。18 世紀の啓蒙思想の先駆となる、経験論的な方法は、デカルト的観念あるいは理性による認知の分

析を批判します。

ロック、バークリー、ヒュームと流れ、やがてデイドロとダランベールの『百科全書』で頂点を迎える知覚の経験論的分析は、人間の認知能力は、外界からの教育を通じて得られるものだということを示します。言語、教育、習慣といった後天的な側面が、知覚を形成することは、狼に育てられた少年はなぜ人間としての知覚能力がもてないかという例をはじめとして、西欧文明による理性的教育の優位性と未開と野蛮といった二項対立構造を浮き立たせます。

18 世紀は西欧にとって東洋への優位性を確立した時代ですが、自らの文明を確信した時代でもあります。啓蒙的教育によって作り出される教育は、文明、すなわち科学的理論を形成し、この科学的理論によってすべての学問は大きな体系として出現します。大きく分けて、想像をつかさどる芸術、記憶をつかさどる歴史、理性をつかさどる科学に分類され、この体系の中に属さないものは学問的系列ではないということになります。しかしながら、こうした理性信仰はときとして不幸をもたらします。フランスの作家アナトール・フランスは『神々の渇き』の中で、科学という理性支配に翻弄されるフランス革命の人々を悲劇的に扱っています。

18 世紀から 19 世紀にかけて西欧人はアジア・アフリカを科学的に分析するために数多くの画家を連れていきましたが、彼らが描いた絵は微細で、すべてのものを細かく描かれています。これも科学的精度の高さの結果というわけですが、実際にはある決められた角度から、一定の偏見をもって描かれたものにすぎません。たとえば魚を描く場合、まるで標本のようにまな板に載せられた状態で横から描写します。微細ですが、前から、あるいは泳いでいる魚は描かれません。科学的教育を受けた人々の視覚能力ですら一定の偏見があるとすれば、ものを認識するということはいったいどういうことなのでしょう。

（3）志向性による知覚―現象学とフッサール

認識に対するまったく新しい問題提起、19 世紀後半から 20 世紀にかけて現象学が提起することになりますが、そうした問題のさきがけとなったのは、フランスの哲学者メーヌ・ド・ビランでしょう。彼は『人間の身体と精神の関係』という 1811 年の書物の中で、18 世紀を謳歌した啓蒙主義的知覚の理解を批判しています。彼はここで、外界によって感官が感じたものを反省する魂の場所、内的感性（le sentiment intérieur）という概念を提示し、再び精神の問題を提起したのです。

この問題は、19 世紀後半に新カント学派の中から、現象学という新しい学問を生み出す力となっていきます。フッサールに代表される現象学とはどんな学問でしょう。それはメーヌ・ド・ビランが展開した内感の問題をもっと深く研究していく学問でした。われわれが知覚するとは、たんに外部からの影響を受けるというだけではなく、そこにいるわれわれが知覚されたものを反省するという積極的面を含みます。フッサールはこれを志向(intention)性という言葉で示しますが、外部から与えられた影響をそれぞれが志向的に反省するということ、これを現象学（Phenomenologie）と呼びます。

その場に存在する人間が、与えられた外部の影響を受けながらそれが何であるかを探るわけです。その際、それを判断する人間の内感は、それぞれの自我ではなく（この点が明確にデカルトと違うところですが）、彼が生きている社会の共同主観性であります。こうした自我をフッサールは直観ともいっていますが、すべての偏見を捨ててなおかつ人間がもっている理性的部分には、自我を超えて一貫して流れている何かがなくてはなりません。それを超越的自我と置きますが、そうした自我は育成されるよりも、存在している事実に重きがあります。その意味で現象学は、ハイデガーのような存在論（Ontlogie）へ傾斜していく可能性があり

ました。

フッサールが問題にしたことは、われわれがものを知覚するということは、客観的な物質がかってにわれわれの認識に入ってくることではないということです。知覚にはあくまでそこにいる人間の関わりが必要とされています。世界に投げ出された人間が、その世界で共同的主観、いいかえれば間主体的関係に立つことであり、それによってものへの知覚は物質がたんに人間の脳に反映するほど単純なものではないということになります。

（4）対象と知覚する際の現代の諸問題

20 世紀の哲学は、18 世紀に生まれた素朴な唯物論、人間はすべて正しく外部世界を認識しているのだという論点を批判したことに大きな貢献があります。もちろんフッサールは、素朴な科学主義に対してより厳密な科学を提唱しようとしたのですが、逆に知覚能力に対する懐疑論を呼び覚ましたことも事実です。

素朴な科学主義が残した負の遺産は、人間はいつでも正しくものを知覚しているということでした。そうした科学主義に対する批判の結果が、歴史学においては実証主義批判であり、思想においては西欧的オリエンタリズム的眼差しへの批判です。素朴な実証主義によって生み出された「すべての世界は同じ世界に向かって進歩していく」という進歩史観が崩壊して久しいのですが、相変わらず学問の方法としては、今なお素朴な実証主義が支配的です。

18 世紀のフランス革命の後、貴族の所有していた資料や美術品を収納したり、展示する古文書館、博物館ができますが、そこは人類文化の集積の場所として栄光に輝く場所でした。西欧的学問の栄華に裏づけされたこれらの施設は、文化の殿堂として、遅れたヨーロッパ、アジア、アフリカの文化への導きの星としての役割を誇ってきました。こうした資料を体系的に集め、分析するということは学問であると同時に、ある価値観を押し付けることでもあります。

最近新しいアジア・アフリカの博物館がパリのセーヌ川岸のブロンリにできました。この博物館の設立をめぐってさまざまな議論が交わされました。フランスでは西欧文化とそれ以外が明確に分けられ、博物館の展示においても区別されております。西欧以外の美術品を展示することは一見文化的価値を評価しているように見えますが、それは一方で西欧美術とそれ以外を原始芸術（primitive art）として区別するということでもあります。ギリシア・ローマから中世、そして近代へと流れるヨーロッパ美術にあわないものを別の場所に展示することは、正統と異端という印象を与えかねません。西欧美術を正統とする価値観からすれば、異端の陳列になりかねないわけです。この問題について、多くの学者たちが博物館の設立の際議論をしたということは、人類文化を認識するという行為が、今では認識にともなうさまざまな価値観を考慮することなく、客観的学問的営為として実現することができないということを意味しています。

非文字資料をめぐるわれわれの研究も、素朴な科学主義によって、あれこれの過去の資料を機能的、分析的に分類するだけではすまないわけです。与えられた資料を認識することは、その資料を即物的に理解することではなく、その資料が作られたある時代の価値を認識し、現代の価値基準と比較考量することだからです。たとえばそこに描かれた絵図は、はたして事実を描いたものなのか、寓意にすぎないのか。細かい民具を描いたとしても、それは『百科全書』で述べるような、科学的に詳細な分析図であるのかどうか。そうした問題を考慮することなく絵図を分析することはできないということです。

3. 非文字資料としての身体技法、図像、景観

こうした観点を理解した上で、われわれ COE の非文字資料研究の可能性について考えてみましょう。現在 COE では、図像、身体技法、景観を非文字資料として研究しています。

（1）図像

図像の資料的媒体は絵図であり、中国、韓国、日本で描かれた絵図の中にある情報を認識することにその主眼があります。図像を読み取る知覚は視覚です。その意味で視覚データは全体として捉えにくい側面をもっています。目の視線では大きな絵の場合、全体を俯瞰することが難しいので、どうしても部分に焦点が定まってしまいます。こうして文字と同じように、全体を部分、部分に細かく切り分け、その各部がどういう内容かという資料研究になってしまいます。

この際、非文字資料という媒体である絵図を取り扱いながら、いつの間にか文字的分析手法が混入していることに注意しなければなりません。全体は個々の部分の総体として成り立つという発想はおそらく、全体の視覚が欠落することから起こっている問題だといえます。対象は非文字であり、その分析手法が文字的であるということが一概に問題であるというわけではありません。問題は絵図全体が部分に切り分けられ、微細な生活用品の分析に終始してしまうことです。非文字資料の体系化というのが、分析手法の体系化ということを含むとするのならば、この点の方法論的分析を今一度検討すべきではないでしょうか。

文字資料と違って絵図の場合、全体として見ることができないわけではありません。全体から見る図像学的分析手法を導入することは是非とも必要なことだと思われます。

（2）身体技法

身体技法についてですが、その資料媒体は身体ですが、身体をそのまま把握することはできません。当然のことながら身体の動的な姿を分析するには、止まった写真では十分ではないわけです。３Ｄビデオカメラを使った研究によって、祭祀の動作を数量的に表す研究が行われています。

身体というテーマは、哲学においてもミシェル・フーコーの問題以来、きわめて今日的テーマになっています。身体と精神が不可分なものであるとすれば、精神の鍛錬は身体の鍛錬となります。近代的精神は、身体の近代化によって生まれた。まさにそうした問題がここ 30 年つぎつぎと突きつけられています。

近代的な女性の身体の出現、人種という身体の出現などさまざまな形で研究が進んでいる分野ですが、基本は身体との問いが精神の問題と不可分に結びついていることです。精神的問題は文字資料によって比較的簡単にわかるのですが、身体に刻まれた刻印は、文字資料ではわからない。反復される儀礼や訓練される躾などは、動作をつうじてでなければわからない。こうした身体が醸し出す内容を、祭祀儀礼の動作の測定からどれだけ導き出せるかというのも身体技法の可能性ではないでしょうか。

それと身体の延長としての民具、とりわけ農具の研究が進められています。これも民具資料の計量的研究ですが、民具を通じて見えてくる人間の動き、さらにそこから見えるある社会の人間の役割、社会関係などがあると身体論とからみあわせて大きな射程をもつのではないかと思われます。

（3）景観

景観は、おもに二つの方向から進められています。一つは、地震や災害、朝鮮半島における神社の変遷と

いった激しい変化の風景、もうひとつはある地域のゆっくりとした変化の風景です。

地震や災害は、その前後にとられた写真や絵といった図像データから、変化を明らかにするというものですが、変化のさまが激しい分だけ、データの分析は興味深いものがあります。戦前の大陸での日本の神社の遺跡を追跡調査する研究も、戦前の写真と現在の状況の比較研究であり、一目瞭然の迫力があります。

とはいえ、景観というテーマとしてはかなり局地的であり、非日常的なものであります。もっと日常生活の中で景観がどう理解されているかという点から見る「澁澤写真」の現在と過去を調査している研究の方が本来の趣旨にあっているのかもしれません。海や山といった景観を人々がどう見たかというのは、フランスの歴史家アラン・コルバンが「風景の歴史」として挑戦したテーマでもあります。海や山といった生活空間は時代によってとらえかたが異なるわけですが、そうした景観に対する人々の認識の変化をとらえる研究となれば非文字資料として新しい研究に資するかもしれません。

ただこの研究も写真の場所や位置、それがいつとられたのかというデータ処理の方に時間がとられている感があり、早くデータの分析、すなわちそこに住む人の生活の分析に進む必要があるようにも思われます。

結語　これからの課題として

さて以上、非文字資料の研究の可能性について、方法論的可能性から論じてきましたが、新しい研究にはつねにつきまとう問題が浮上しています。暗中模索の部分と、既存の研究に足をひっぱられている部分です。「人類文化研究のための非文字資料の体系化」というのを文字通り、既存の研究の延長線上でのみ考える必要はないということです。体系化というのは新しい研究方法を開発することでもあります。その意味で、新しい可能性に向かってどんどん冒険をすべきなのではないかと思います。

特にここ30年で学問的研究方法がすっかり様変わりしています。これまで当然と思われてきた実証研究も、かなり哲学的議論を入れてやりなおさねばならなくなっています。新しい方法に対してむしろ積極的に果敢に挑戦する研究でいたいものです。